

## 『入菩薩行論』における自己と他者

大 西 薫

0. 「シャーンティデーヴァはいかにして菩薩道を破壊したか」という衝撃的な副題の論文で、ポール・ウィリアムズは『入菩薩行論』(以下 BCA) 第 8 章の三詩頌における「議論」を批判的に検討し、“why we should be altruistic at all has still not been answered, but the way Śāntideva appeals to the teaching of no Self at *Bodhicaryāvatāra* 8: 101-3, is not as such going to work” と結論する<sup>1)</sup>。この刺激的な論文は興味深い問題を多く提起しているが、彼の議論の諸前提には再考を要するものが多い。その詳しい検討は別稿にゆずるが、筆者はウィリアムズの分析哲学的視点は BCA を読むのにはせますぎると考える。そこで本稿ではウィリアムズとは別の読みの可能性—彼の問題設定と結論を再考しなければならない根拠—を示す一例として、シャーンティデーヴァ (以下 ŚD) の「レトリック」<sup>2)</sup> がもたづいている身体論の一面を論じる。本稿の目的は、ŚD が BCA を書くことによって明らかにしようとした自己と他者の構造を素描することにある。この小考察は、ŚD の身体論は市川浩のいう「人称的世界」が示唆するのに近い自他の重層的生成を前提としていることを示すだろう<sup>3)</sup>。

1. 今回、議論の出発点とするのは第 8 章の次の二つの詩頌 (VII. 114,115) である。

手など [の六肢] は身体 (kāya) の一部であることによって大切にされる。どうして身体的存在 [である他者] (dehin) も、世界 (jagat) の一部であることによって、同じように大切にされないのか。

身体は自己ではないのに、経験の反復(abhyāsa)によって自己であるという意識(ātmapuddhi)が自分の身体に対して生じる。それと同様に、自己であるという意識を実践の反復(abhyāsa)によって他者にまで拡げることがどうしてできないのか (pareṣv=api... ātmatvaṁ kim... na jāyate).<sup>4)</sup>

この二詩頌は〈自他の変換〉(para-ātma-parivartana) とよばれる瞑想実践のはじめに位置しているが、この瞑想は〈自他の同位性〉(para-ātma-samatā) というもう一つの実践の直後に続いている。従ってこの二詩頌は、一方ではその読者に対し自己と

他者の同位性をみるべきことを説いているとも読めるが、他方〈自他の変換〉の「理論的見地からの証明」(ラ・ヴァレ・ブサン)<sup>5)</sup>を行っているともいえるだろう。〈自他の変換〉はⅧ. 140～173が明らかに示すように〈私〉のパースペクティブと〈彼〉のパースペクティブとの変換である。つまりこの瞑想実践は自己と他者のパースペクティブの変換可能性を主題とする。我々がパースペクティブをもつのは我々が身体的存在であることによるならば<sup>6)</sup>、ŚDが〈自他の変換〉のはじめで我々の身体を問題とし、「経験の反復」による身体に対する自己意識の生起をその読者に考察させようとしているのは当然といえよう。なぜなら、すぐにみるように、その自己意識の生起とはパースペクティブの生成だからである。

「経験の反復」(abhyāsa)は〈自他の変換〉を理解する鍵のひとつだと考えられるが、これによってŚDが我々のパースペクティブの起源を語ろうとしているのはⅧ. 111からも明らかである。

他者(父母)のものである精液と血液の滴[の融合]に対し、[実体としての〈私〉というものは全く存在しないにもかかわらず、経験の反復(abhyāsa)によって〈私〉という観念(aham iti jñāna)が生じる。<sup>7)</sup>

「精液と血液の滴」は生理学的な世間の常識によってとらえられた身体の起源だといってよいだろう<sup>8)</sup>。ŚDが〈私〉という観念をこの生体の起源との関連から説きおこしているのは、彼が自己は胎児の生成と共に始まる生体の発達に従って形成されるとみていたことを示唆する。自己の形成をこの生体の発達とそれと平行してすすむ社会化の過程との関連で捉えるのは社会学の基本的観点だが<sup>9)</sup>、ŚDが〈私〉という観念の源泉であるという「経験の反復」は、この社会化の過程を意味していると考えられることができるだろう。ここでいう社会化とは、まなざしやほほえみの交換に始まる他者との相互行為を繰り返すなかで、ある経験の領域が自己なるものとして他者と区別されていく過程である。この社会的・心理的発達とともに我々は徐々に〈私〉という観念を持つようになる。しかし、これは「我執」に他ならないとŚDはいう<sup>10)</sup>。彼が生体の起源を語るのは、自己の形成は生体の発達ときり離すことができなからだが、この文脈での重点はむしろ、その身体の起源には他者しかなく〈私〉という実体は存在していないということにある<sup>11)</sup>。〈私〉はアートマンなどに根拠づけられた実体ではなく、「経験の反復」つまり他者との相互行為の繰り返しによって生じる「観念」であり、この意味で本質的に相互依存的な存在である。この〈私〉の生成は、ピアジェの指摘をまつまでもなく、自らの身体を中心とするパースペクティブの生成であり、それは自らの身体

のもとに世界を〈中心化〉する過程に他ならない<sup>12)</sup>。

ŚDはこの「経験の反復」という概念を導入することによって、身体のもとに世界を〈中心化〉するという我々の習慣的で自然な傾向を問題としているといえるだろう。手などが「身体の一部であることによって大切にされる」一方で、身体的存在である他者が大切にされないのは、この「経験の反復」による世界の〈中心化〉の結果ということになる。が、注目すべきは「大切にされる」(abhiṣṭa)という言葉である。ŚDはここ(VIII. 114)で身体という認識や概念を語っているのではない。彼は身体の或いは身体に対する我々の行為を指摘し、そこから翻って我々の他者に対する振る舞いを問いただしているのだ。その振る舞いは日常的現実においては自然にみえるが、菩薩行という実践においては問題とされ修正されるべきものである。

しかし、他者に対する振る舞いを矯正しようとする試みにおいて、なぜŚDは身体と世界の相同関係をもちだしてくるのか、我々はここでŚDが〈自他の同位性〉のはじめに述べていることを想起しなければならない。VIII. 91で彼はいう。

身体が手など[の六肢]に分かれていることによって多くの部分をもつが、ひとつ[の全体]として護られるべきであると同様に、この世界(衆生界)全体も護られるべきである。なぜなら世界も同様に(=多くの部分に)分かれているが、同じ苦しみと幸せを本質的に共有しているからである<sup>13)</sup>。

ここでもŚDは自己の身体が「ひとつの全体として護られるべき」という我々の身体に対する行為を指摘することから〈自他の同位性〉を語りはじめている。つまり〈自他の同位性・変換〉という一組の実践で問題とされているのは、単なる認識主観ではなく行為の主体としての自己と他者なのだ。さらに、ŚDが単に小宇宙としての身体と大宇宙としての世界という神話的・象徴的な関係を語っているのではないことも明らかだろう。彼が主張しているのは、そういった質料因的な対応ではなく、身体と世界との構造的な対応である。身体は手足などからなり、世界は自己と他者からなる。この意味で両者とも「多くの部分に分かれている」が、両者を対応させているのは「同じ苦しみと幸せを本質的に共有している」という自己と他者をもつ存在の共通構造であるとŚDはいう。つまり彼はここ(VIII. 91)で、世界の一部としての自己と他者はそれぞれの経験領野においては根源的に断絶しているが<sup>14)</sup>、行為の構造のレベルでは相互に交通することが可能なはずだと主張しているのだ。それによってŚDは、行為主体としての自己と他者の「相互通約可能性」<sup>15)</sup>こそが〈自他の同位性〉の根本的テーマであることをまず提示

しているのである。

2. この文脈において読むならば、VIII. 114 は身体と世界の対応関係を一見唐突に持ちだしているようにみえるが、そのレトリックの基本には ŚD の一おそらく大乘の菩薩思想に一貫している一身体論とその前提となる自己と他者の構造があるといつてよいであろう。自らの身体はそれだけが「自己」なのでは決してなく、それが「大切にされる」のは経験の反復によって世界が〈中心化〉され、〈私〉という観念が身体に対して生じるからにすぎない。従って「どうして身体的存在である他者も世界の一部であることによって同じように大切にされないのか」という問いは、自他の相互通約可能性＝構造的同位性を行為のレヴェルで受け入れることができなくなっている自己中心化された身体（＝精神）のあり方から、読者を脱却させようとするレトリカルな仕掛けに他ならない。いいかえれば、この問いは、VIII. 115 の「自己であるという意識を他者にまでどうして扱げられないのか」とともに、〈脱中心化〉（ピアジェ）に近い操作をより高い位相で意識的・方法的に行うのが〈自他の変換〉の実践であることを明らかにしている。〈脱中心化〉とは人称の重層的構造を了解し、自己だけでなく他者にも〈私〉という主体＝人称的自己を認めることであるが、これによって成立する「人称的世界」、そしてその世界と ŚD の身体論が根ざしている無我の世界との連関については稿を改めて論じなければならない。この二つの世界の重なりとずれをみることは、今回検討した詩頌の読みから翻って、ウィリアムズがとりあげた三詩頌をどう読み直すことができるかという考察につながるという目論見だけ、ここでは示しておく。

- 
- 1) Paul Williams, "The Absence of Self and the Removal of Pain: How Śāntideva Destroyed the Bodhisattva Path," *Altruism and Reality* (Curzon, 1998), p.176.
  - 2) ウィリアムズが BCA の〈作者〉の「議論」を問題とするのに対し、筆者は「レトリック」の分析がより重要であるとする。それは〈読者〉をまきこんだ世界のなかでテキストの生態を探る手がかりを与えてくれるからである。Cf. 拙稿『『入菩薩行論』のレトリック』『日本仏教学会年報』64 (1999)。
  - 3) 「人称的世界」とは自己を実体でなく、関係であるとみなし、人称代名詞のシステムに代表される自己と他者の相互性・可逆性を、その基本的構造とする世界である。Cf. 市川浩「〈身〉の構造」『人称的世界』(弘文堂, 1978) p.167.

\* 注4)～15) は紙数の都合により割愛。尚、御希望の方にはお送りします。  
 (キーワード) 入菩薩行論, 身体, 自己と他者, 人称的世界

(ミシガン大学大学院)